

平成 21 年度 特別研究助成報告

一遍・『一遍聖絵』の研究

砂川 博

時宗の宗祖一遍の思想と事績を辿るには『一遍聖絵』、『一遍上人絵詞伝』『播州法語集』などが根本史料である。このうち、一遍の遺弟聖戒が詞を書き、絵師円伊が絵を描いた『一遍聖絵』は没後 10 年にして制作されたもので、史料的价值はもっとも高い。

『一遍聖絵』については、①記事の信憑性、②詞と絵の関連、③現地の実景描写か否か、④聖戒と円伊との間に綿密な打ち合わせの有無等の問題が、また初期時衆教団史の根本史料としての『聖絵』の意義、或いは限界につき様々な角度から研究されて来た経緯がある。

そこで 09 年度は主に巻 5 に絞って現地調査等を重ね、その成果を「『一遍聖絵』第 5 の詞と絵（下）」にまとめた。なお本稿は『時衆文化』第 20 号（岩田書院、2009 年 10 月）に発表した。これは 09 年 4 月に逝去された編集同人金井清光氏の追悼号で、冊子としては異例ながら単行本『一遍聖絵と時衆』として編集、刊行したものである。同じく「『一遍聖絵』第 6 の詞と絵」は、『時衆文化』第 21 号（岩田書院、2010 年 10 月）に発表した。なお 2 冊とも本学図書館に寄贈している。

幼児の音楽的発達に関する基礎研究

岩口 摂子

本研究は、さまざまな側面での幼児の音楽的能力の測定をとおして、幼児の音楽的発達にかかわる資料の収集と研究を目的としている。今まで

は、幼児の旋律認知を中心に、幼児は音階の異なる単旋律の違いをどの程度正確に聞き取ることができるか、音階の異なる単旋律の情緒的意味をどのように理解しているのか、音階によって嗜好に違いがあるか、ということ等をテーマに、横断的調査を行ってきた。また平成 19 年度と本年度の研究助成を得て、幼児における音楽と感情との関連についても継続的に調査を行っている。音楽の感情を理解することは、音楽教育のもっとも重要な課題であるが、3 歳までには調性の違いをある程度把握し、音楽の感情評価ができることが知られており、そのような音楽的感性の形成には文化という環境要因（文化化）が大きくかかわるとされている。そこで幼児の音楽的発達を文化化の側面から検討することを研究テーマとし、文化化のもっとも大きな要因と考えられる民族での比較、すなわち今回は日本と中国の幼児を対象に、日本と中国の音楽を提示して、音楽に対する感情価を測定し、自文化と異文化の音楽に対しての感じ方の違いが、既に幼児の段階で認められるかどうかを検討した。それら本助成の成果の一部は、相愛大学人間発達学研究第 2 号等に掲載し、公表する予定である。

Mycobacterium avium-intracellulare complex (MAC)

由来新規特異糖ペプチド脂質の糖鎖構造の解析と
生合成機構及宿主感染防御における役割の解明

水野 淨子

細菌や真菌感染症における宿主免疫応答は、蛋白抗原を中心に多くの知見が集積されている。最近、新たに脂質分子が従来の主要組織適合抗原 (MHC) クラス I, II と異なる CD 1 分子拘束性 T, NKT 細胞により認識される機構が判明した。抗酸菌を始めとする一部の細菌、真菌には宿主免疫応答に多大な影響を与える脂質分子が含まれ、病原性・毒性に寄与していることが想定される。本研究では、これら新規脂質分子を検索し、その

構造と生合成、生理活性から宿主感染防御における役割について検討した。

非結核性抗酸菌症の主要起因菌である *Mycobacterium avium-intracellulare* complex (MAC) は、細胞表層抗原 glycopeptidolipid (GPL) の糖鎖構造により、28 種類の血清型に分類されるが、GPL の生合成経路や合成遺伝子については未解明である。本研究では 13 型 GPL の糖鎖構造を解析した。さらに血清型 7, 12, 13 型 GPL の構造を規定している 3 種類のメチル基転移酵素をコードする遺伝子 *orfA*, *orfB*, *orf2* をクローニングし、その機能を解明した。7 型 GPL は *orf2* により末端糖の 2 位にメチル基が転移し、12 型 GPL は *orfA*, *orfB* により末端糖の 3 位と末端から 2 番目のラムノースの 4 位がメチル化されていた。13 型 GPL は 12 型菌と同様の *orfA*, *orfB* 遺伝子を持っていたが、*orfB* 遺伝子に 1 塩基置換が存在してその機能を失っていることが明らかとなった。また、GPL は天然では糖鎖の一部がアセチル化修飾されており、天然型 GPL 13 は toll-like receptor (TLR) 2 により、宿主自然免疫を活性化した。これら GPL の構造、生合成経路、宿主免疫応答の解析は MAC 菌の病原因子論的、系統的解析に有用である。

また、*Mycobacterium avium-intracellulare* complex (MAC) は、特異糖ペプチド脂質抗原 (glycopeptidolipid, GPL) により 28 種類の血清型に分類さる。肺 MAC 症患者から分離された *M. intracellulare* Ku 11 株に新規糖鎖構造を有する GPL を認めたので、その化学構造と宿主応答について検討した。精製 GPL の糖鎖構造は α -Rha-(1 \rightarrow 3)-2-O-Me- α -Rha-(1 \rightarrow 3)- α -Rha-(1 \rightarrow 3)- α -Rha-(1 \rightarrow 3)- α -Rha-(1 \rightarrow 2)-6-d- α -Tal と決定した。また、GPL は TLR 2 依存的に宿主認識されたが、弱アルカリ水解した GPL はその活性を消失した。以上より、Ku 11 株由来 GPL は新規 GPL であり、宿主認識には糖の修飾基が必要であることが示唆された。

平成 21 年度 特別演奏会助成報告

チェロ奏法の研究－チェロリサイタル－

斎藤 達男

演奏会タイトル：チェロとピアノで奏でる魂のソナタ

日 時：2009 年 5 月 31 日（日）午後 2 時開演

場 所：兵庫県芸術文化センター小ホール

曲 目：1) C. ドビュッシー チェロとピアノのためのソナタ

2) A. シュニトケ チェロとピアノのためのソナタ (1978)

3) J. ハイドン デイヴェルティメント ニ長調

4) R. シュトラウス チェロとピアノのためのソナタ ヘ長調

op.6

平成 16 年度には 18 曲の小品を集めたチェロリサイタル「愛の音」を、平成 18 年度にはやはり小曲を主体とする「愛の音 Part 2」を開催した。多数の楽曲を一晩のコンサートでの演奏において、各曲の個性を十分に表現すべく、チェロ奏法におけるあらゆる「変化」を追及したが、今回はそれらの経験をもとに視点を変えて、複数の楽章をもつ大きな作品、すなわちソナタを主体とする演奏会を行なった。プログラムは大曲のシュニトケとシュトラウスのソナタを軸とし、中規模のドビュッシーとハイドンの作品を加え、前半、後半、それぞれ約 40 分となるように配した。各曲の個性と表現すべきものを理解し、それぞれの作品にふさわしい音色、ヴィブラート、運弓法、呼吸感、ニュアンス等を考慮し、収斂して客席に伝えることを目的として、奏法のいわば統一感をはかることに心を砕いた。まだまだ未完の点が見受けられるが、経験こそ向上に向けての道しるべとして、今後も努力を重ねていく所存である。

平成 21 年度 研究成果刊行助成報告

『英語 vs. 日本人－日本人にとって英語とは何か－』

木下（森光）有子

相愛大学学術研究助成により、2009 年 9 月に開文社出版から『英語 vs. 日本人－日本人にとって英語とは何か－』（共著）を刊行した。6 章（360 頁余）から成る本書のうち、私は第 1 章、第 2 章、第 4 章と第 6 章（のほとんど）を担当執筆した。

英語は世界共通語であるからという理由だけで、ただ英語を学び使えるようになるだけでは、本当の意味で英語を学んだことにはならない。ところが、日本人にとっての英語の意味を深く考えることなく、公立小学校でも英語が必修化され、日本人の中に英語崇拜主義とも思える人々がいるのが現実である。

本書は、グローバル化と多元化とが同時に進行している現代社会において、日本人はどのような英語とどのように付き合っていくべきなのかをもっと真剣に考える必要があることを主張するものである。本書では、この問題をより深く考えることが可能となるよう、言語学、英語教育、言語政策などの観点から、全体的に、そして一つの流れの中で考えた。それぞれの分野のみを扱う著書は多いが、この種の著書はなく、そういう意味でも本書は特色を出すことができたと言える。そして、さまざまな側面から英語また英語と日本語、英語と日本人との関わりを見た上で、日本人はこれからどのように英語と（また日本語と）関わっていけばよいのかを提言した。このような本書の姿勢を評価してくださる読者もあり、例えば、「方法論ばかりが目立つ英語教育論が多い中で、英語の全体像や英語と日本人との関わりなどをまず提示して、その全体像の中で英語教育や児童英語を扱っている姿勢に好感と共感を覚える」という評を頂いた。さらに、本書執筆の際には、日本人の内なる標（しるし）である日本語を意識的に見つめ、普段無意識に使っていることばに関して意識的に考える機会にもして

もらいたい、と常に考えながら執筆にあたった。それは本書の随所に反映されているはずである。

高等学校で英語と国語を担当しておられる方から、本書が教科指導に役立っている旨のコメントを頂戴したが、現代のような時代に生きる者として、多くの人々が英語とは何か、また母語とは何かを考えるために本書が少しでも役に立つことを強く望んでいる。

『メディアと文学が表象するアメリカ』

山下 昇

平成 21 年度の学術研究成果刊行助成をうけて、21 年 10 月 30 日に英宝社出版より編著『メディアと文学が表象するアメリカ』（394 頁、定価 3990 円、700 部）を出版した。私は編者として全体を俯瞰した「序章 共振／交錯するメディアとアメリカ文学」を執筆し、全体の編集の任にあたった。

全体を 2 部構成とし、それぞれ 7 章を配置し、全 14 章とした。第 1 部メディアとしての文学／文学のなかのメディア、においては奴隷制廃止や女性解放のメッセージを伝えるメディアとしての文学の例を取りあげたり、作品のなかでの電話やクルマなどのメディアが果たす役割の分析をおこなった。第 2 部交錯するメディアと文学では、文学作品と異メディア、主に映画、舞台、パフォーマンスとの交錯によってあらたな地平が開かれていることを検証した。これらのプロセスを通して、メディアの発展がいかにアメリカ人の思考や行動様式に影響を与えたか、文学はそれをどのように描き出したかを、歴史的コンテクストにおいて追究した。

文学とメディアの関連を論じた研究はアメリカにおいてもそれほど多くなく、本邦においてはほとんど初めてと言ってもいいパイオニア的研究と自負している。日本アメリカ学会会報「新刊紹介」、図書新聞「新刊紹介」においても好意的な書評をしてもらった。また新英米文学会機関誌 *New Perspective*、日本アメリカ文学会機関誌『アメリカ文学研究』でも書評が掲載されることが決定している。